

# 猫はまたたび



猫野 栞

(1)

---

吾輩は猫が好きである。

だからどうしたという突っ込みを自分に課しながら、虚しさを背負ってキーボードを叩いている。私のいるリビングと、寝室とは引き戸で隔たれており、開け放たれた引き戸の先でベッドの上から私を凝視するちんまりとした生き物がいる。

私が愛してやまない猫様だ。

灰と白のまだら模様で外国猫のような風貌の雌猫「あんじゅ」。

天使みたいだねえ、かわいいねえと名付けた可愛らしい外見とは裏腹にとてつもなく計算高く、元野良でいつしか実家に居着いてしまった肥満黒猫「ティム」を時に殴りつつ、我儘放題・自由奔放に家の中を闊歩している。どう性悪な猫なのかは、追々紹介していきたい。

あんじゅ、ティム共に今は私の新居で生活している。

徒然なるままに、この子たちの引っ越しの過程や日々を書き連ねていきたい。

三月の頭。親友のような夫と共に新婚生活を送る中、かねてより計画していた実家の猫を引き取るため父に車を出してもらった。県を二つ跨る、猫の引っ越し大作戦だ。

十数匹いる愛猫の中から二匹だけを連れていくのは心が苦しかったが、中でも若く、懐っこい子らを選んでキャリーに入ってもらった。それがあんじゅとティムだった。

あんじゅは、実家の長老猫である三毛猫ジェムのひ孫にあたり、見目麗しい一歳半の女の子である。

普段他の猫と連れあうこともせず、家族にも滅多に甘えてこないが、物静かで空気の読めるいい子であった。過去形であるのは、引っ越しが済み一か月が経った今では恐ろしいほどの甘えん坊で猪突猛進なお姫様となっているからだ。とにかく、当時はとても大人しい女の子であった。

ティムは先に述べた通り、元野良である。

家の猫がひよんなことから脱走し、帰ってきたときに一緒に遊びに来たのがティムだった。ティムの姿が見えるときに、母が餌を与えていたのが、いつしか玄関をくぐってしまったというのが顛末だ。全身が黒いのに、抜ける毛は白いものと黒いものの両方があり、どんな衣服であろうとも目立つ毛むくじゃらにしてしまう特殊能力を保持している。

他の猫らと喧嘩をするわけでもなく、けれど仲良くするわけでもないティムは、玄関だけを縄張りとしていた。怖がりな女の子なのだが、一度触ると野生を捨てたかのように甘え出す仕草がかわいらしくて、共に住もうと決めたのである。

家の猫らが「なんだどうした」とキャリーの周りをそわそわしている中、私と父は母と猫らに挨拶をして家を出た。

高速道路を走る中、あんじゅは不安そうにひたすら声を上げ続け、ティムはただただ無言で震えていた。

新居に着き、すでに用意していたケージに二匹を入れたところ、あんじゅのそばにティムが寄り添い「ここはどこやねん」と警戒心を露わにしていた。あんじゅはうっとうしそうにしながらも、ティムをはねのけることもせず、しばらくは用意された餌に手をつけずに暖めあっていた。

しばらく二匹の様子を見ていた父は実家に帰り、私は仕事帰りの夫を家に迎えた。見ず知らずの人間(夫)を見た猫たちは夫よりも環境に不安がっていたようで、夫の挙動にはあまり興味を示していなかった。

写真だけで猫たちを見ていた夫は満面の笑みで

「こんにちは、かわいいねえ」

とケージの扉を開けて話しかけていたが、当たり前ながら二匹共ケージの外に足を運ぼうとはしなかった。

間を置いて夫がそっとケージのそばに人差し指を近づけたとき、あんじゅがその匂いを嗅ぎに来たところで「抱いて落ち着かせることはできないものか」とケージからそっと腕に寄せてみると、ずいぶんと大人しく抱かれてくれる。

体がこわばっている様子はあったが、驚かせないように気を付けながらソファに腰を下ろすと、そのまま膝の上で落ち着き始めた。隣に座っていた夫にあんじゅを預けても暴れるわけでもなく、じいっとしている。細い体温が心地よさそうに、夫はあんじゅの小さな頭を撫でていた。

私はティムも同じようにソファに連れていった。彼女も体に力が入っているものの、全力で嫌がるわけでもなく、呆気なく抱かれてくれた。

ただしティムはなかなかのデブ猫で、あんじゅとは違い前足の付け根で抱えるには苦しいくらいの重さである。代わりに、膝上に乗せたときの重量感と暖かさは圧巻だ。

引っ越し初夜は、ケージの隣のトイレを使うこともなく、そもそもトイレに行きたがる素振りも見せず、ただたまに水分補給をするだけで二匹とも大人しく過ごしていた。

ネットの口コミで見かけた「引っ越し後の夜泣き」もなく、あとは少しずつ慣れてもらってトイレを覚えさせれば大丈夫だろう、くらいに思って、ペットシートを敷いたケージの中のあんじゅとティムに安心感を覚えながら眠りについた。

翌日から「野生のティム」に悩まされるとも知らずに、のうのうと。

(3)

---



引っ越し当夜のティム。

「あて、どないしたらええん？」という顔をしているがその実たぶん何も考えていない。

(4)

---



同じく当夜のおんじゅ姫。

稀代の美猫で初日だけやたら大人しかった。

(5)

---



実家の長老であるジェム様。

この子には家の誰も勝てない。とてつもなく賢い。10歳。